KWIC索引を利用した遡及的書誌*

――社会科学における書誌と図書館――

松　田　芳　郎

ボルヘスが不死の人の対概念として，あらゆる書物，書かれたものだけでなく書かれうる書物のすべてを含む，で構成された図書館を想定しその図書館の全容をつきとめるため《本Aをつきとめるために，最初にAの位置を指す本Bに当る。本Bをつきとめるために，まず本Cに当たる。こうして無限につづけて行く……。わたしはこれしきの冒険のために年月を浪費し使いはたしてしまった》《図書館は無窮であるとわたしは断言する》《すべてのことはすでに書かれているという確実さは，われわれすべてを無に帰し，幻と化する》というときに，その意味する深淵に目眩めかない者が居るであろうか。

La Biblioteca total を求める，有限の存在である人間のあるいは空しいかも知れぬ試みの一つをわれわれはここで提示しようとする。というのは，そもそも日本人であるわれわれの間には図書館なるものの概念が存在しないのではなかろうかという疑問を消し去る事が出来ないからである。

以下に於ては，社会科学の分野で本格的書誌をわれわれが作ろうとするとき，最小限何が前提となるかを図書館管理という形で検討し，更に，最近の書誌作成のアメリカ等の機械化の動向を展望し，最後にわれわれの計算機処理目録作成実験を通して得た問題点を点検しておくことにする。

---

* 本稿は，1972年度文部省科学研究費・試験研究(1)「社会科学における標題・抄録によるKWIC索引，コーディネト索引等の検索効率の比較実験」（課題番号331-8002-783001）の一部であり，1970-71の二ケ年に渡る伊勢丹奨学会「商学専門図書館における情報検索体系の開発」による研究の延長でもある．この間共同研究者による数度の全体研究会の場の他，小樽商科大学経済研究所報告例会（1973年5月2日）などで報告し種々の有益な批判を受ける機会に恵まれた．記して謝意に代えたい．

I　図書館管理と学説史研究

1.　図書館管理と中核蔵書

情報量の急激な拡大への対応と，産業工学や医学などの分野での現時的情報の即時的効果の認識に伴う情報流通速度の上昇に対する必要性は，日本に於ても情報検索・文献検索に対する関心を高めて来た。当初比較的他の学問分野とは孤立した医学図書館，企業内資料室を中心としたこの種の近代化の試みは，計算機等による大量情報処理技術の向上に伴って，ようやく大学附属図書館などを含めて，非自然科学的学問分野——人文諸学や社会科学をも捲き込んで来ているといえる。(1) 然しこれらの分野での情報検索の在り方は，実は思想の展開と密接な関連を持っているために固有の問題が存在するはずである。それを無視して工学的分野などと同様な情報管理を行なったとするならば，それは思想をも，他の工学的技術と同様に借用に借用を重ねる立場にますます追い込む事になり，創造的思考形成には役には立たず，逆に絶えず思想をも衣裳のように脱ぎ変えて輸入した過去のわれわれの歴史を踏襲せざるを得なくなる。

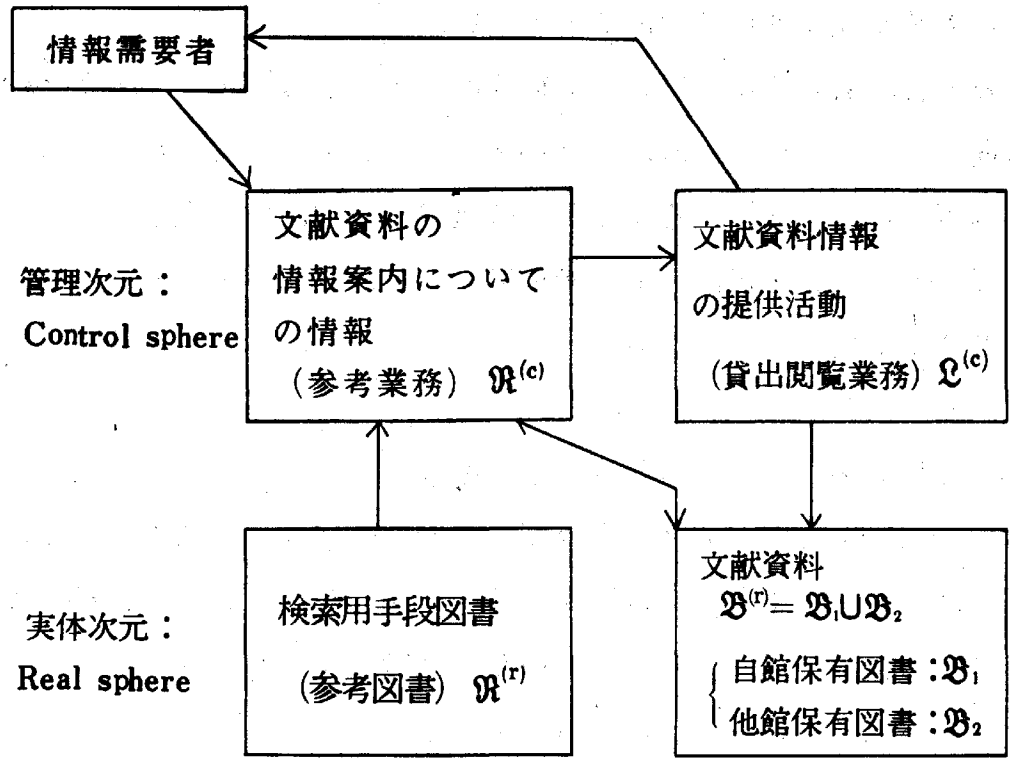
かかる立遅れの発生の原因の一つとして，社会科学の分野での，創造的思考の場，あるいはその様な思考訓練の場として，情報管理の主体の一つである図書館を認識し，組織しようとする志向が薄かったことにも求めることが出来る。

図書館というものが何かというときに，実体としての蔵書群とそれを収納する書庫とを連想しがちであるけれども，機能としての図書館はかかる実体を伴わずに（即ち図1の情報管理の次元の問題として）考えることが出来るのである。(2) 然し実際は，完全に自館所蔵資料なしで効率的な運用がしにくい

---

(1)　例えば，森口繁一教授を代表者とする文部省科学研究費・特定研究I「学術情報処理に関する基礎的研究」の三ケ年に渡る検討の結果［44］，［45］，［46］は様々な有益な示唆を含んでいるけれども，総体として理工学的分野からの検討の比重が高いといえる．

(2)　本当に有能な librarian が居て綿密に設計された組織があるならば，写真電送装置と電話だけで設計された図書館を夢想する事は不可能ではない．



第1図 情報検索と貸出業務

とするならば，何を自館に所蔵し，その所蔵したものをどこ迄需要者の接近し易い形（例えば開架式閲覧室）にしておくかが図書館としての機能発揮上の重要な問題となる。[3] したがって適切な選書と，文献資料の保管形態の決定とそれに適合した資料に関する情報の蓄積とが具体的な図書館の表面に見えない業務の中核となるはずである。それがあって，図書館というものが社会的共有財産（commonwealth）として利用されることになる。[4]

しかし日本の現状では平均的には，かかる存在としての図書館への認識は大学での研究者の間では低い。全冊通読する必要のない，然も共同購入による規模の利益の享受し易い雑誌などの定期刊行物に対する関心が多少強い程度で，ひどい場合には私費購入の際の選書の失敗の後始末か，自己の書庫の

(3) 今 Kornai; *Anti-Equilibrium*, Amsterdam, 1970 の表記法に従って，情報管理の次元を (c)，実体の次元を (r) で示す．参考業務の集合を $\mathfrak{R}$，貸出・閲覧の業務を集合 $\mathfrak{L}$ で示し，$\mathfrak{B}^{(r)}$ 中自館所蔵の文献を $\mathfrak{B}_1$，他館所蔵部分を $\mathfrak{B}_2$ と定義しておく．

(4) 拙稿［31］pp. 1-2.

狭隘さに対する安全弁程度である事が多い。[5]

かかる研究者層の間からは，蔵書構成の中核となる書物（core books）に対する関心はなかなか現われないといえる。[6] 又あったとしても意見の一致を見る事は難しい。本来かかる中核蔵書の選書には学説史研究家の協力があって可能であろうが，図書館の蔵書構成について図書館学者との間に協力関係はあまり成立していないと言って良いであろう。[7]

2. 学説史研究者と図書館学研究者との断層

日本における学説史研究者と図書館学者との断層は，一部の研究者の散発的な努力はあるとしても，[8] それが図書館の系統的蒐書による蔵書構成に迄及ぼされ難い状況にあるといえる。その原因は図書館学研究者の側だけではなく，学説史研究者の側にも求める事が出来る。

社会科学の学説史家の間には，逆接的であるが，本質的に学説史に対する軽視が存在するといえる。即ち，学説史は，マルクス（K. Marx）理論の正統性の論証かまたは，その理論の萠芽的形態を先行者の理論に探し求めることであるといったマルクス主義的学説史家としても問題のある接近方法があまりにも多すぎたからであるといえる。この立場からは極めつきの古典のみが図書館に必要だということになる。更に滑稽なのはかかる立場からの現在の学問の諸潮流の分析であるといえる。そこでは Marx 理論はプロクルーテスの寝台の役割を果して新しい研究を裁断してしまう。例えば，サイモン

---

(5) 北海道大学図書館の利用状況に関する調査はかかる意味での日本の研究者の知的水準を示すものとして面白い．森口［46］所載，pp. 87–105．
研究者というのはわれわれを含めて面の皮の厚いもので，ここで示された原則論に対して異を説える率直な人はむしろ少なく，《あなたの購入したこの本は……》という指摘をした際に，怒って学問研究の自由に対する侵害だという姿勢をとるだけに過ぎない．

(6) 中核蔵書に対応する中核雑誌（core journals）については引用分析によって，それに接近しようとする試みはあるといえる。宮地［41］［42］はその問題に対する予備作業として注目に値する．

(7) 拙稿［31］p. 3．注10参照．岩猿［18］は問題の提起と主としてアメリカの状況の紹介を行なっている．河井［23］は西ドイツの実例を示していて興味深い．

(8) 拙稿［31］p. 2 注5，pp. 21–22．注51–53参照．また杉原［52］を見よ．

(H.A. Simon) の社会科学の新しい定式化の試みも，ヴイットゲンシュタイン (L. Wittgenstein) や，カルナップ (R. Carnap) に対する言い古された批判の孫引きと一緒に棄てられるといった珍現象が発生する。このような発想からは決して既存の理論の枠組みの変革というのは生れてこないといえる。

他方いわゆる近代経済学理論と俗に一括される分野では，日本では学問研究は積み重ねによる進歩によって支えられているのであって，学説史研究無用論があり，これからはいわゆる自然科学研究分野と同様に新しく刊行される文献が問題であり，絶えず一定期間経過後に選書 (weeding) して，保管書庫に移管するという発想が生れる。この対極にあるのが，書物は創造的思考の触媒であり，それが何について書かれたものであるかは問わないという立場がある。

3. 書物の創造的思考に果す役割

新しい理論なり思想なりの定式化に書物というのが何等かの役割を果すのであろうか——これは解答不能の問題であろう，何故なら完全にユーリステック (heuristic) な思考も，完全にアルゴリスミック (algorithmic) な思考もあり得ないからである。然し前者の立場を重視する人にとっては，書物は自分の思考形成の触媒の役を果すに過ぎず，内容がいかに表面的にはその主題からかけ離れたものであろうとも，その書物の一節が深い交感 (la correspondance) を引き起すならば——丁度プルースト (Proust) にとってのサンザシの花の様に——十分であるといえる。そこではあらゆる書物が不死の生を持つものでありうる。これに対し後者の立場にとっては，既存の文献というのは，何が発見されたかを伝え，何が発見されていないかを暗示するものであり，それらの積み重ねの内から，既知の命題の体系化・組織化がなされるのであり，その意味では現在生きている文献は明日は死んだ書物となるべく運命づけられたものであるといえる。

情報検索に対する様々な評価の対立ひいては図書館のあり方に対する評価の対立もこの書物の不死なるものの性格と，死するものの性格とどちらがよ

り重要であるかという対立に起因するものといえよう。

表面的には，自然科学ひいては社会科学の一部の分野では，技術的・組織的研究が可能であるのだから，そこでの文献は絶えず死するものであり，人文諸学の分野では，私的体験の根として利用されるものであるから，不死の文献を対象とするといった学問分野の違いの様に思われている，例えば，最近の日本の例としては，森口・大須賀「図書の価値曲線のスベリ台模型」をあげることが出来る。(9)

これは，書物は出版後引用効果等で，次第に利用される様になり，定常的に利用される一定期間を過ぎると急速に減少し，使われなくなるので，開架書庫から閉架書庫さらにはいわゆる保存書庫（deposit library）に移す事が合理的であるとしている。またこの書物の寿命判定は分野別に利用度の標本調査で可能なのではなかろうかという仮説が提示されている。ここでの問題は二つに分れる，一つは，スベリ台模型を仮定する事の可否であり，いま一つはその寿命の判定に利用率を採用することである。この利用率を測度とする考え方は，森口モデルだけではなく，費用／便益分析を利用する人々の間にもしばしば見られる。(10)

然しかかる発想は創造的思考の過程に対する無理解に根ざしているのではなかろうか。

ある文献が不死となるのは，ボルヘス（Borges）の「話すということは類語反復に落入ることだった」という発想の延長線上にあるともいえるし，それは，新たな思想的文脈での旧い思想の復活であるともいえる。更に転じてはいままで見えなかった新たな内的構造の発見でもあるのである。かかる立場からは一見死せる文献と不死の文献の区別は難かしいかに見える。しかし，何がかかる転換を可能にするかを考えると，ある程度迄はかかる区分が

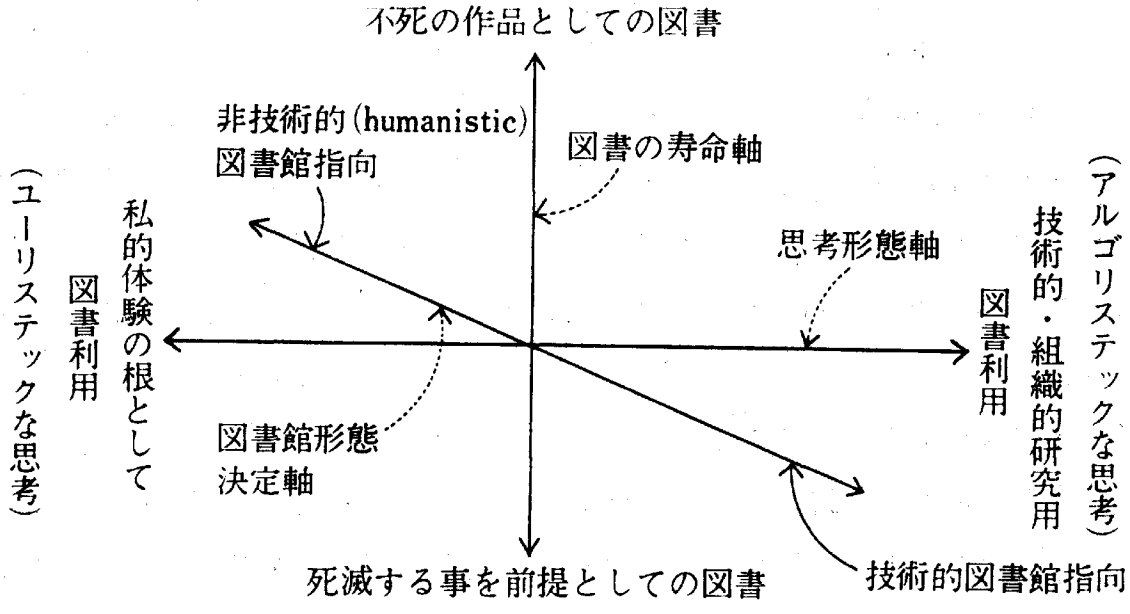
(9) 森口［46］pp. 59–67. 丸谷・牛島［46］pp. 81–83 所載. 森口「探索・引退・分担」で，スベリ台モデルが最初に提示されたのは，昭和47年10月31日の報告である.（pp. 20–21, pp. 130–134）

(10) 例えば藤井［12］で，Raffel と Shishko の「図書館のシステム分析」中で興味を寄せている（p. 86）のはこの点である. 利用率についての図書館学者の発想の一例として森［43］をあげておく.

可能であるといえる。

クーン（Kuhn）は，かかる発想の転換を科学革命における新たな範式・定式化（paradigm）の提示と呼んだといえる。[11] とするならば，科学史の世界での不死の作品に相当するものは，新たな思考の枠組・概念装置の樹立をした文献に求める事が出来るのではないかということである。

然し，かかる文献に対する利用率が果して高いといえるかどうか。[12] 既存の概念の枠組のなかで，その局部的問題の展開を志している限りかかる文献に立ち帰る事はかならずしも多いとはいわれないであろう，けれども新たなparadigmの創造を志すものが，しばしば現に流布され極楷となったparadigmそのものを樹立した者の文献に立ち帰る事は，俗に《古典に帰る》という現象として今迄もいい古されてきたといえる。（このような現象は，ユ



第2図 図書の種類・研究様式と図書館の形態

(11) Kuhn [29] を見よ.

(12) これは，教育システムとレベルの問題と深くかかわっているといえる．基本的に古典に戻る事を原則として作られている教育が，いわゆる自然科学・技術教育に適合するかというのは，イギリスでも問題となっているが，しかし依然としてかなり安定した形をとっているといえる，アメリカでの reading list と assignments の組み合せまたフランスにおける œuvres choisies の地位を考えてみても判る．その点での日本の方式は易きに流れているといえないだろうか．また次の問題としては，どの段階の学生・生徒にどのようなものを供給するかという事とも関係しているが，何でも開架に出すという方式は，幼稚園児をインキューナブラの開架室に置く様なものである．

ーリステックな側面の強い非自然科学的分野にとどまらないと思われる節もあるが今は問わない。)

先に言及した，いわゆる近代経済学理論などでの，日本での学説史無用論は，もっぱらその時々の paradigm を与えられたものとして技術としての導入が主流であり，その主流の範囲内での技術改良であり，独創性である事が多かったことの帰結であると考えられる。(13)

それぞれの分野での新たな paradigm の創造も，帰する所は思想的営為であり，無意識的にか，かかる思想史的展開と切断しようとして過ぎて来た日本の近代経済理論の研究者達からは不死の存在としての書物に対する関心はあまり現われなかったといえる。(14)

4. 引用分析と書誌編集

学説史研究を独立した学問分野としてではなく，それぞれの学問研究の分野での不可欠の研究史の展望と置き換えてみると，引用分析と書誌編集とがそのための補助手段として浮びあがって来る。又これが系統的蒐書をするためにも不可欠の作業である事を考えるならば，図書館管理の中心には，実はかかる能力を持った図書館員を置く，または育成し，能力を発揮させることがあるといえる。ヨーロッパ諸国乃至アメリカで，librarian と呼ばれる専門職は実はかかる能力の持主を指すのであるといえる。

近来の日本での図書館近代化のための行政が重点を置いて来たのは，かかる意味での専門職としての図書館員の養成よりも書物の在庫管理としての近代化のみであるというのは酷評であろうか。(15)

---

(13) 近年ようやく，近代経済学の定着史を射程に収めた研究が現われだした．拙稿［34］［35］，また，玉野井［55］，長・杉原［53］．

(14) 学説史と社会思想史に深い関心のあった手塚寿郎の他の数理経済学者の間での孤立はこの事の反映であるといえる．数理経済学者が当時の学問状況のなかで相対的に孤立していたとすれば，そのなかでの社会思想史に対する関心の持主はさらに孤立したといえる．

(15) 第二次世界大戦後の学制改革に伴う大学設置基準による私立大学設立・昇格の際の図書設備の充実が重視されたことが，相対的に大学内での図書館員の地位の向上をもたらしたためか，私立大学図書館職員の活動は，国立大学の図書館職員 *

かかる状況からの脱却の試みの一つとして，最近急速に開発されて来た，情報検索の手法がどこ迄有効であるかを吟味し，具体的書誌作成の経験を通じて何をいいうるかを検討してみたい。

II 書誌編纂の現状と問題点

1. 学説史の補助手段としての文献検索

a) **現時的書誌** 文献検索が，自分達をとりまく学問状況の確認という意味では，現時的書誌 (indexes or abstracts for current awareness) としての抄録誌・索引誌が第一に注目される。*Bibliographie der Staats- und Wirtschaftswissenschaften*, Dresden, 1906–44 や，A. Grandin; *Bibliographie gén rale des sciences juridiques, politiques, économiques et sociales. Supplément.* Sirey, 1928–1951 のように1900年代の初頭に迄遡のぼる事が出来る。(16)

第二次世界大戦を間に挟んで，これらの書誌の統廃合が行なわれたり，新しい索引誌・抄録誌類が創刊された。然し索引誌・抄録誌類を編集し維持するのは極めて費用がかかるといえる——第1に網羅性を確保するために増加する出版物を確実に捕捉すること，定期刊行物については収録対象誌を確保する事，第2に，これらの文献を解読する能力のある専門家を確保する事である。日本の場合も同様である。戦前には個人の作業または一研究機関の独力で刊行可能であったものが，現在ではもはやその様な形では維持出来なくなって来ている。それにもかかわらず，それらの困難を乗越えて共同編集・刊行という形で継続刊行を維持し成熟しえたものは数える程しかないといえる。

---

* に比して目ざましいものがある．しかしそれだけに帰着しうるであろうか．公務員主導型の労働組合運動のなかで，一部の半職業的浅薄な労働運動家が，体制内での労働はすべて生きるための手段であると決めつける過程で，図書館職員の専門家としての自立を防げる役を実際には果してきている事例を見たりすると，単に，当世の風潮だけに帰着しえない問題がある．無論，長沢［47］p. 67–69 が指摘している様に待遇上の問題もあろう．然し，pp. 97–81 で指摘している様に，職業倫理の確立も問題となって来る．

(16) 細谷［16］pp. 121–149 参照.

この種の書誌は社会科学の場合に，単なる現時的書誌であるに留まらず，累積する事によって遡及的書誌（retrospective bibliography）として学説史的展望を与えるものへと転換する事が出来る。しかし，完全に学説史的展望を与えるためには，その出発時点の部分に接続する前史に相対する部分の遡及的書誌が完成して，そうなって始めて学説史の補助手段として有効であるといえる。

b）遡及的書誌とその水準の変化　逆に遡及的書誌は一定期間を経て追録が作られて始めて十全にその能力を発揮しうるといえよう。丁度 Grandin の現時的書誌は，遡及的書誌の追録として作られたのに相応するといえよう。[17]

遡及的書誌として，先づ第一に問われるものは，どの様な意図と選択基準とで収録文献を選択しているかである。即ち，そこでの収録基準が網羅性にあるのか，評価を含んだ選択性にあるのかである。前者に傾むいた場合には，いわゆる目録に近づくし，後者に傾むけば，展望 review 乃至は学説史に近づくといえる。

戦前の日本に於てのこの種の代表的な書誌である大阪商科大学『経済学文献大鑑』大阪，昭和9–14年，4巻．や増井（Masui, Mitsuzo (ed.)）*A Bibliography of Finance*, Kobe, 1935. は網羅性の強い書誌であった事は，現在に於てはその利用性を高めているとはいえ，結果的にはかかる学説史的評価を避けた収録基準の設定になっていたといえるのではなかろうか。いずれにしても，この種の書誌は完全性を期そうと思えば，共同作業である事を避けられないし，かかる共同作業に対する日本の社会的風土の不適応は研究者の側からのこの種の大掛りな書誌の作成の試みを第二次大戦後は杜絶させている。

現在の様な様々な視角からの学説史の再検討の必要な時点での学説史の補助手段としての書誌は，編者の立場からの主観性の介入よりは，むしろ系統

(17) A. Grandin: *Bibliographie gévérale des sciences juridiques, politiques, économiques et sociales 1800 á 1926*. 3 vols., Paris, 1926.

的網羅性のある事と，同時にその網羅性の徹底化が必要とされているといえる。特に，国際的に見ての研究者の層の増大と専門主題の細分化は，印刷手段の多様化と出版点数の増大と相まって，流通する情報量の飛躍的増加をもたらしているといえる。[18] 然も学説史研究が，前節に述べた様な信仰告白的教義問答から脱却するに従って，学説の変容を思想の社会史として位置付る事によって，単にある理論の paradigm の樹立者だけでなく，祖述者などの各非主要論客に至る迄の著作・小冊子類，機関誌などの解析を含む，運動体としての思想の多面的諸局面を追求する様になって来たといえる。[19]

かかる研究状況は，従来の網羅的な遡及書誌をして，選択的書誌であると見なす程の情報量の増大を要求しているといえる。

他方かかる膨張した書誌は，そのなかから必要とされる情報を適切に供給するための検索手段を備えなければならないことになる。

逆に情報検索効率を高めるための技法は，当然の事であるが，書誌に記載する事項の深化をもたらすといえる。そこでの記載は様々な形での内容の評価を伴ったものでなければならなくなる。これはかかる書誌編纂を念頭に置いた目録作成の librarian に対して，一定の専門分野での学問的能力を要求するようになって来たのだといえる。

一方，伝統的図書館学を中心とした実務家集団の側からは，省力化という目標のために書誌記載の簡略化が推進されて来ているというのが世界的な動向であるといえる。[20]

---

(18) Paul Weiss; Knowledge; a growth process, *Science* 131号, 1960, 6月 Kochen [27] に再録，参照．また Pritchard [51] pp, 58–55 は，単に出版点数の増加の事情だけではなく，いわゆる索引誌類に収録される状況の解析が示されており，索引誌類が完全に追跡しえていない状況を示しているといえる．

(19) 例えば，David Lane; *The Roots of Russin Communism; a social and historical study of Russian social-democracy 1898–1907*. Assen, 1969 を見れば，最近の社会的運動体の解析のきめの細かさを知ることが出来る．

(20) ALAからAA規則に移っての論文集などの寄稿者毎の標題分出数の制約があげられる．共同研究・会議形態の研究会の増加とその報告書・議事録の増加とその大冊化は世界的な傾向であるといえる．それらは，従来の単行書の扱いとは異ならざるを得ないのだが，雑誌論文中心の索引・抄録誌からは単行書として除外される場合が多く問題点となっている．

従来の呼び方の他に，ドキュメンタリスト（documentalists）という表現で呼ばれる様な人々の集団が発生して来たのは，かかる研究者の側の要求の拡大と図書館実務者側での後退の断層を埋めなければならないという事から現われたと見る事が出来る。

2．書誌編纂と分担蒐集

a）**目録・書誌作成の専門化**　省力化という事の必要性を否定するわけではない，現実にもそのための努力は進行している。その主力はやはり計算機等による機械処理であるといえよう。然しそのような目録作成は，単一の図書館が実施した場合には，非計算機的処理費用は，決して減少せず，むしろ計算機に書誌事項を入力する段階で増加するともいえる。(21)

ただこれによって，再タイプ費用が節約出来るし，非図書カード形式での打出しも可能になるので，冊子体印刷目録原稿・原版の自動作成が出来，二次的段階では専門的労力を著しく節約する事が出来る。

即ち基本的書誌データを入力した master file を作るという点では専門家労働力が必要であるし，そのための人手は節約出来ないという事である。ただしこの master file には完全な汎用性をもたせ，それを共同利用する事によって，絶大な省力化が可能であるといえる。これは現実には MARC II project, UK MARC project などによって動き出しているといえる。(22)

b）**総合目録と図書館網**　問題は日本では古瀬大六提案(23)の様に「大学図書館事務処理センター」という形で専門化しそれが十分な効果を果すだろうかという点である。MARC II project についてみたとしても，書誌事項の記載についていうならば，前述の図書館学系の書誌学者の退行現象の影響を受

(21) 少くとも書誌事項を記載した原稿から計算機への入力に変換する費用が増加するわけである．
（この部分をＭＡＲＣテープに換えた場合などの費用比較は，Dolby etc. [8] p. 23 ff 参照.）

(22) Dolby etc. [8] 同上．Jeffereys [21].

(23) 森口 [44] p. 54 以下.

けているという点が問題であるし，社会科学にとって不可欠な遡及性についていうならば，U．S．の場合で1968年に遡るのにすぎない。[24] 従って適切な主題書誌を作ろうと考えるならば，その主題に適合した目録作成能力のある者が各々の専門書を抱える図書館で協力しなければならない。結局のところ可能な方法は専門別の分担蒐集であり，それらを結んでの総合目録の作成であるといえる。第1図に示した図書館網は拡大して，第3図のような形をとるべきであるといえる。即ち，各図書館は，中核蔵書のなかの一部分をその図書館の最も強い分野に特化し，そこについては出来うる限りの網羅性を保つ事である。[25] そこでの蒐書の中心は，主題研究者でもあり書誌目録・編纂者でもある専門的 librarian，又は documentalist が当るべきであるといえよう。[26]

---

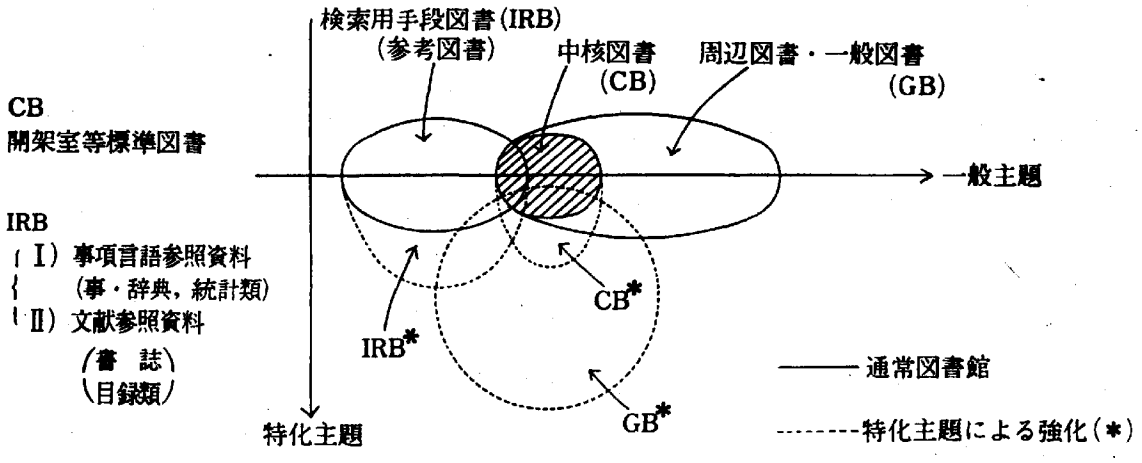
(24) これは立場の違いでもある．自然科学系統の場合は1968年迄も遡のぼるという．

(25) 小樽商科大学の附属図書館における特化の試みは，拙稿［31］，［32］を参照されたい．日本ではまだまだ，この問題は未解決であるといえる．先に示した河井［23］は研究室と大学中央図書館との西ドイツでの分担例の紹介であり，現在日本総合大学の中央図書館のおかれている状況にとっては，参考になると思われる．

(26) かかる図書館組織網の作成という事については研究者の思考の転換が最初に必要である．先に，拙稿［31］p．22でも強調しておいたが事態の改善は難しいといえる．北海道地方の例をあげれば，道立図書館が札幌の郊外に移転・拡大するに当って，北海道内の図書館の所蔵総合目録をカード目録で作成し維持していく事を計画し，国立国会図書館も，日本全体の総合目録作成のテストとして大いに注目し期待した事業であった．これが挫折したのは，蔵書数では北海道で一番多い，北海道大学附属図書館長が賛成しなかった事によると伝えられている．理由は北海道大学にない本が他にあるはずがないという事だったそうである．

この巷間伝えられている事が事実であるかどうか，事実であるとすればその不明をどのように釈明するつもりなのか．仕事というのは一度挫折した事を再開するのが，新規に始めるのよりもいかに大変であるかという事を思うとき，釈明や謝罪などというものは三文の役に立たない．同じ社会科学研究者の一人として，この計画の実現に努力した図書館員の方々との会合に出る時，身の細る思いをするのは私だけであろうか．小樽商大附属図書館の旧小樽高商からの旧蔵の貴重書の利用に来学される北海道大学の研究者にこの事実を指摘してみた所で死児のよわいを数えるようなものである．

意識の上での民主的運動の支持者が自己の足場については無関心という日本的知識人の典型をここに見る．拙稿［31］に記したため多くの図書館人から問い合せを受けた小樽商大の図書館近代化計画も今年度は中止されている．将来の再開についてはそのような機会があったら改めて記したい．



第3図　単位図書館の蔵書構成と主題特化

c)　Master-file の活用と検索技法　いずれにせよ，評価を含んだ書誌事項の含まれた目録の master-file が完成し，更に絶えず追加の情報を記録することによって更新して行くことが可能となっていく。

一度かかる master file が完成するならば，それを計算機処理 (summary process) をして，著者名順・書名順・刊年順などの配列替を行なって作表する (tabulation) 事によって，種々な索引を作る事が可能になって来る。[27] これには，人手によるならば，あまりにも費用がかかりすぎて，実際的には作り出す事が不可能であった索引 (KWIC, KWOC, Citation などの索引や CODEX など) を含める事が出来る。

これは，単に多様な索引作成といった次元に留まらない。一般利用者にとっては jargon になりつつある図書館学者の作り出した件名目録，主標目決定記入に伴う様々な規則というものが，カード状目録にとって最適である様に設計されたためである事 (分出・重出の制約等々) が多いだけに，計算機により通覧性のすぐれた冊子目録を絶えず更新して作り出せるという事は，従来の目録規則・書誌記載の慣行をも大きく変える可能性を有しているということになる。[28] それと同時に計算機処理に適合した書誌・目録記載規則を模

(27) 松井 [38], Vickery [58] p. 133 f. 参照.
(28) Houghton [17] pp. 48–59, Linderman [30] 等参照のこと.

索する必要を意味している。

III 計算機処理目録の現状

1. KWIC索引に見る社会科学と自然科学の差

a) KWIC索引と件名索引 計算機処理の各種目録の内で，最も実用性が高く評価されているものは，標題中に用いられている語を利用した KWIC (Key-Word-In-Context の略語で quick と掛け言葉) 索引であるといえる。[29] この評価の高さは，KWIC索引が当該文献の筆者の使用した標題語をそのまま使用して，書誌・目録作成者が，thesaurus などを使って統一・整理していない点に求められる。これは一見利用者の側で，関連する言葉を幾度も引かなければならないので，不便な様であるが，実際はこれを統一する事の方が不便な場合が多い。即ち伝統的に使用されている件名目録 (subject catalogue) と比較して見るとこの点が判る。

件名標目の場合には，使用している件名の相互の間には原則として，概念相互間に上位・下位の順位付けを付さない事になっている。単に同意語 (See 記号) と類義語 (See also 記号) の区別をするにすぎない。然し実際はこれらの概念相互の間にも上・下関係があり MEDLARS の MeSH (Medical Subject heading) の様に区別 (See under, See also related, See also specific 記号) をせざるを得なくなって来る。しかしこれを徹底させていくと，分類目録に転化しなければならなくなるし，他方境界科学と呼ばれているものは，伝統的学問対象の再編成を伴っているだけに，件名相互の間の概念の上・下関係も変る可能性を持っている。[30]

最大の問題点は，この件名標目表自体が，膨大となり，先に指摘した様に

---

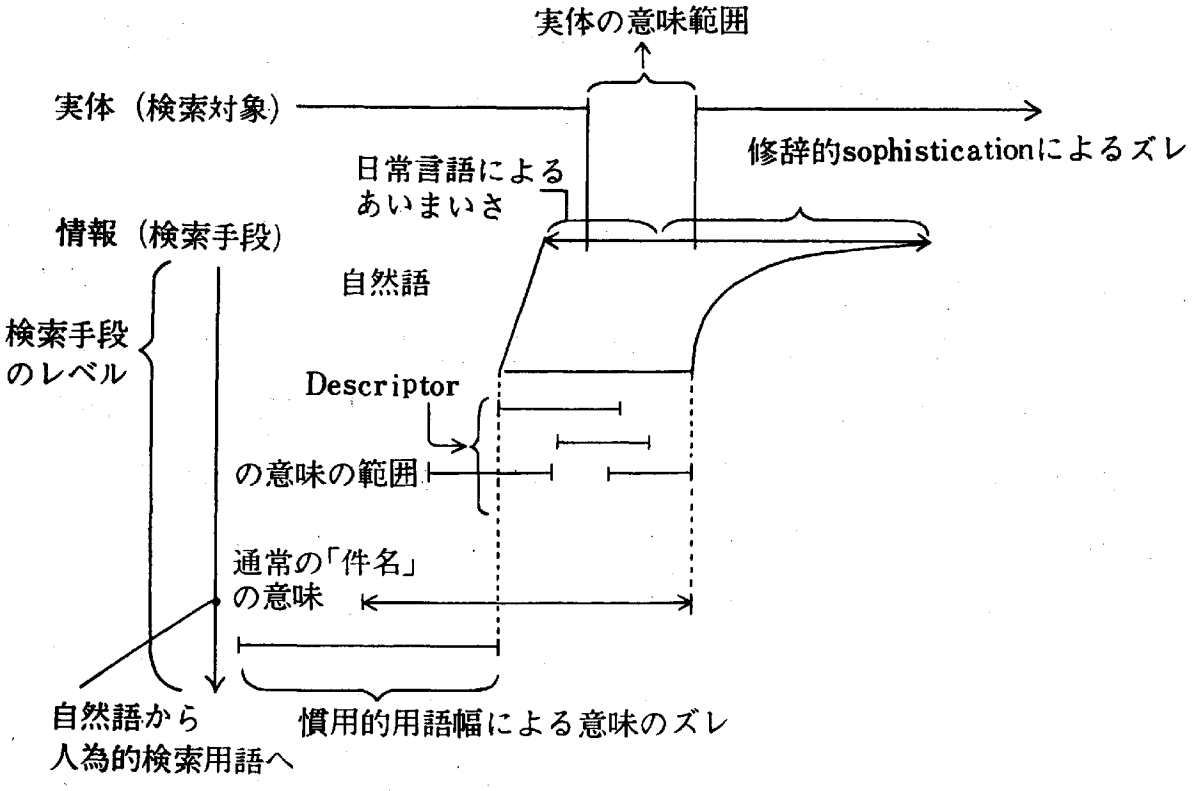
(29) とりあえず，われわれの試験研究グループの共同研究者の松井 [38] を見られたし．すでに上梓した *KWIC index series for social sciences* (Editor-in-chief; Yoshiro Matsuda) の解題で記した部分は以下では原則として再述を避けてある．合せて参照頂けると幸である．

(30) 以下の件名目録についての議論は，日本語の場合を除く．日本では従来極めて件名目録が未発達であったといえる．木田橋 [24]，加藤 [22]，山下 [59] 参照．

それ自体図書館学の非専門家には使いこなせず，それ自体検索の対象とさえなる事と[31]，通常一文献当り付与される標目の数は多くなく有効な検索手段たりえない点[32]にあるといえる。

これに対してKWIC索引の使用する語は原則として，抄録者・索引者などの使用するdescriptorとは異なり著者が使用している語であるという意味で，自然語（natural words）と呼ぶ事が出来る。利用者が，著者と同一層に属するならば，この自然語の流通圏に含まれているわけであるから件名目録の場合の様な断絶感は少いといえる。

即ち第4図に示す様に自然語と件名標目との間では意味のずれが発生しうるといえる。



第4図　検索用語の意味のズレの程度

b）**自然科学と社会科学の差**　ただ，自然語の場合には，又著者の用語法のいかんによって別箇の意味のずれが発生しうる。即ち修辞的Sophistica-

(31) 長山［48］.
(32) 松井［36］p. 243 以下参照.

tion である。もっとも自然科学の分野の場合には比較的内容を直截に反映する語が選ばれる事が多く，しかも修辞的 Sophistication が少いだけに，極めてKWＩＣ索引の効率を高くするといえる。

従って，この種の索引が抄録誌等に採用されたのは早かったといえる。ＩＢＭのルーン (H.P. Luhn) が公表したのが，1959年であった事[33]を考えると *Chemical Titles* の 1961 年創刊の早さが判るといえる[34]。（第１表Ａ参照）

次にKWＩＣ索引の導入された分野は，概念範疇の明晰な法律学である。これも又速報性の重じられる分野であり，現時的 (current awareness) 書誌が発達しているといえる。この事からKWＩＣ索引は現時的書誌に向いているという偏見が発生したといえる。然し実際は遡及的書誌としても有効である事は，最初に雑誌の累積索引 (cumulative index) の形で明らかになった。（第１表Ｂ） ただこれらの累積索引が社会科学のなかでも主として，政治学・社会学などの分野で始まった事は，これらの分野が多重分類 (faceted classification) を必要とする様な多面的接近の行われているものである事を考えると重複検出に便利なKWＩＣ索引に注目したのは十分理由のある事だといえる。

雑誌論文等の索引誌としてではなく，主題書誌としてKWＩＣ索引が作成される様になったのも，この政治学・社会学の分野が最初であると思われる。（第１表Ｃ）[35]

2. 機械処理の限界と新たな書誌編纂の試み

a) 文献内容の表示と descriptor 社会科学の分野の文献は，特に思想史

---

(33) Luhn の原論文は Claire K. Schultz (ed.); *H.P. Luhn: Pioneer of information Science; selected works.* London, 1968 に再録されているので今日では比較的容易に見る事が出来る．Fischer [10] を参照．

(34) *Chemicel Titles* については NIPDOK [50] 所載の Fred A. Tate の翻訳を参照されたい．

(35) ここでの表は，かならずしも網羅的でないし，書誌事項が不明の点もあり，省略したものも多い．また筆者未見のものも含む．*Jurindex* の入手などを含めて木田橋・松井両氏の他国立国会図書館参考書誌部の教示を頂いた．

的要素が強くなる程文学的表現が濃くなり，標題の直接的内容の描写性(descriptiveness)が減少する事は先に言及したが，それはKWIC索引の検索効率を下げることになり，適切なdescriptorsの追加が必要となって来るといえる。[36] この補充の必要率はクラフト(D. H. Kraft)の *Index to Legal Periodicals* を使用しての実験では，10.5%，[37] ヤンダ(K. Janda)の *American Political Science Review* の場合で33%であり，[38] 政治学の方が法学より文学的表現に富む事を思わせる結果となっている。

この種のdescriptorの追加は機械的に作成出来るというKWIC索引の長所を減少させる事になるけれどもわれわれの実験結果から見ても不可欠の作業であるといえる。問題はかかるdescriptorとして，件名標目表で使用されている様な語を用いるか，あるいはもっと直截な自然語に近い表現を採用するかである。われわれの知る限りでは社会科学分野でのKWIC索引の作成が図書館学の研究者というよりも，ヤンダや，ヒル(R. Hill)のように主題を持った研究者の主導で作業が始まっただけに，むしろ後者の自然語的語の補充という形をとっている。ヤンダは当初この作業を政治学専攻の学部学生に委ねようとしてすぐその案を放棄して独力で行なったという。これは全体の統一性を確保する上には役に立っているが，共同作業の場合にはかかる統一性を保つのは難しいといえる。(ヒルの作業の場合にはどこ迄共編者で弟子のアルダス(J. Aldous)とで行なったのか他の協力者の協力を得ているのかは明らかにされていない)。[39] この問題の全面的検討は将来の課題であるとしても，われわれの実験結果からの漸定的結論としては専門の主題研究者の参加が望ましいといえる。[40] それは適切なdescriptorが，いわゆる件名よりはより細かな自然語を用いる事によって得られると思われるからであ

(36) keywordとstop-wordとの関係等の分析については，松井[37]を見よ．
(37) Kraft [28].
(38) Janda [20] p. 57. etc.
(39) Aldous & Hillの索引は第1表C参照．Janda [20].
(40) そのような意味ではCODEX (code index)の具体的適用である *Universal Reference System* は注目に値する．Janda [20] 参照．現物は九州大学附属図書館で閲覧の機会を得た．

第1表 KWIC index 発達史略表

	A. INDEX & ABSTRACTS	B. CUMULATIVE INDEX	C. SUBJECT BIBLIOGRAPHY NATURAL SCIENCES	C. SUBJECT BIBLIOGRAPHY SOCIAL SCIENCES
1959			**Luhn,** H. P. ; Keyword-in-context Index for Technical Literature. (KWIC index). RC-127. IBN.	
1960			**MIT Libraries** ; Science Abstracts of China.	**Feldman,** Julian ; Selected Articles on Methodology & Research in the Social Sciences. American Political Science Review. 1960. Sep.
1961	Chemical Titles. KWIC cf. Chemical Abstracts. 1907– (American Chemical Society) Biological Abstracts. 1926–, KWIC (Union of American Biological Societies)		**IBM San Jose Research Laboratory** ; Dissertations in Physics. 1861–1959. **Mimosa Frenk Foundation for Applied Neurochemistry & IBM** ; Index to Neurochemistry.	
1962	Index to Legal Theses and Research Project. 1952–, KWIC. (American Bar Foundation) Current Legal Legislation Index, (American Bar Foundation)			
1963		**Straus,** Marray & **Graham,** Suasanne C. ; Marriage and Family Living. Vol. 1–24. (1939–62)	**Farley,** Earl ; Kansas Slavic Index.	
1964		**Janda,** Kenneth ; American Political Science Review, Vol. 1–57. (1906–1963)		**Bwy,** Douglas ; Social Conflict ; a keyword-in-context-bibliography on the literature of developing areas, with supplementary reference from Latin America.
1966				**Aldous,** Joan & **Hill,** Reuben ; International Bibliography of Research in Marriage and the Family. 1900–1964.
1967		**Janda,** Kenneth & **Cutler,** Neal E. ; Midwest Journal of Political Science. Vol. 1–10. in Vol. 11, May issue. **O'Barr,** Mark & Jean ; Current Antholopology. Vol. 1–24. (1959–1966)		
1970			**Gotterer,** M. H. ; KWIC Index ; Computer Management.	
1971	JURINDEX ; l'informatique appliquée à l'actualité bibliogrphique du droit française. 1971–1972. KWIC (Institut de rescherche d'informatique juridique.			
1973				**Matsuda,** Yoshiro & **Matsui,** Sachiko ; Bibliography ; Works on econometrics, reviewed in Econometrica. 1951–1971. **Matsuda,** Yoshiro, **Sato,** Shigeyuki **Hiroda,** Akira & **Matsui,** Sachiko ; Bibliography ; Works by Saint-Simon and Saint-Simonians. 1802–1970. **Matsuda,** Yoshiro, **Sato,** Shigeyuki **Hiroda,** Akira & **Matsui,** Sachiko ; Bibliography ; Works on Saint-Simon and Saint-Simonians. 1831–1970. Vol. I.

る。ヒルとアルダスの家族・婚姻の社会学書誌がKWIC索引の補助として，いわゆる件名索引に近い小項目58の主題索引を付し，それを更に大項目に統合分類してあるのは将来のこの種の索引のあり方を暗示しているといえる。

いずれにせよ，この種の目録が学説史研究の補助手段として有効であるというわれわれの立場からは，主題研究者の参加が，結局の所不可欠であるといわざるを得ない。実際今一つの計算機処理をした書誌であるポリン(B.R. Pollin)の *Godwin Criticism*[41]は，data-compilationの段階での一つ一つの文献に与えた内容表示がその多様な計算機処理による索引を可能にしているということが出来る。

この書誌では，ゴドウイン(W. Godwin)に関して書かれた資料3,379点を，ゴドウインの生存中の雑誌等の定期刊行物に載ったもの(1,223点)，書物・パンフレットの形をとったもの(239点)，死後1966年迄に定期刊行物に載ったもの(702点)，書物体のもの(1215点)に分け，各々に簡単な内容要約・抄録(長いものでは150語程度)と，12種類の記号とが付け加えられている。

第5図に示した例は，本学の『商学討究』の旧シリーズ(小樽高商時代)[42]と，新シリーズに載った部分をとってみた。これら日本語文献は慶応大学白井厚教授の協力によるとの事である。

b) 分類機能の活用と索引 ポリンが，作成した，計算機処理による索引は，i) 言及人名，ii) 言及作品，iii) 著者名，iv) 収録文献の年代順配列(月・日を含む)，v) ゴドウイン著作名順書評，vi) ゴドウインについてのみ書かれた文献・論文・追悼文一覧，vii) 同上文献についての書評，viii) 言語別一覧(13言語)であり，これらはおのおの文献番号と種類別記号の対になっている。

---

(41) 本書の書評については，白井・藤川の『三田学会雑誌』所載のものがある．

(42) 旧シリーズにすぐれた論文が多く載った事を考えると，今しばらく残部の保存の必要がある様である．

2456A. OTARU UNIVERSITY, SHOGAKU TOKYU (THE ECONOMIC REVIEW, OF THE INSTITUTE OF ECONOMIC RESEARCH OF OTARU UNIVERSITY) / VOL. 9, (DEC., 1934), 219-251.

HISAAKI ITO, 'CONTROVERSY ON THE POPULATION PROBLEM BETWEEN MALTHUS AND GODWIN' / G'S POSITION ON POPULATION, THE CRITICISM OF MALTHUS,

THE DEVELOPMENT AND SIGNIFICANCE OF THE CONTROVERSY. THE ARTICLE IS IN A SPECIAL NUMBER COMMEMORATING MALTHUS'S BIRTH.

2457A. OTARU UNIVERSITY, SHOGAKU TOKYU (THE ECONOMIC REVIEW, OF THE INSTITUTE OF ECONOMIC RESEARCH OF OTARU UNIVERSITY) / VOL. 11, NO. 2 (DEC., 1960).

RYO SUZUKI, 'THE STRUCTURE OF G'S PJ, PART 1.'

2458A. OTARU UNIVERSITY, SHOGAKU TOKYU (THE ECONOMIC REVIEW, OF THE INSTITUTE OF ECONOMIC RESEARCH OF OTARU UNIVERSITY) / VOL. 11, NO. 3-4 (MARCH, 1961).

RYO SUZUKI, 'THE STRUCTURE OF G'S PJ, PART 2.'

2459A. OTARU UNIVERSITY, SHOGAKU TOKYU (THE ECONOMIC REVIEW, OF THE INSTITUTE OF ECONOMIC RESEARCH OF OTARU UNIVERSITY) / 12, NO. 3 (NOV., 1961), 77-97.

RYO SUZUKI, 'WILLIAM GODWIN'S VIEW OF THE ENGLISH REVOLUTION' (WILLIAM GODWIN NO IGIRISU-KAKUMEI KAN) / A STUDY OF G'S HISTORY OF THE COMMONWEALTH AND HIS UNUSUAL ABILITY TO VIEW THE PERIOD CLEARLY.

2460RB. OUTLOOK / 106 (MARCH 21, 1914), 651.

REVIEW OF BRAILSFORD, SHELLEY, GODWIN, AND THEIR CIRCLE / THE AUTHOR MAKES US FAMILIAR WITH THE FIGURES IN THE CIRCLE AND PROVIDES INTERESTING COMMENTS ON THE EFFECT OF THE FRENCH REVOLUTION IN ENGLAND.

第5図 Pollin; *Godwin Criticisism* の例

この書誌は画期的な労作である事は間違いないけれども，この書誌の内容分析をする事によって，ゴドウインの研究史をもっと刻明に明らかにする事が出来たのではないかと考えられる。

書誌の本体自体は，単純な前述の4分類である，当初ポリンは，死後を，ヴイクリア時代と現代とに分割したが，前者の量が相対的に少ないので併合したとしている。然し全体を通読または索引で全体を何度か引き直しをするには少し膨大すぎるのであり，書誌の本体自体を分類する必要があるといえ

る。ヴイクトリア時代の少なさは，それ自体時代のゴドウイン評価であり，それらが，どの様な言語別で出されているかを通読出来る様に配列するというのも一つの方法である。又は，ゴドウインの著作に関する書評の時代別・言語配列といったものを本体とする事も可能なはずである。

又抄録内容中の単語を分析して，一種の件名目録を作成する事によって，ゴドウインの様な多彩な活動をした人物を浮彫りにする事が出来ると思われる。この書誌全体を通じて name approach とでもいうべき，人名・書名を通じて検索する方法がとられているが，これは確に学説史的接近には有効であるが，これだけの情報が計算機処理のためにMTに格納された以上は，今一歩踏み込んだ主題検索の手法も試みられるべきであったろう。

いずれにしても，これらの点は，この書誌があまりにも伝統的書誌形態を踏襲しすぎた故であると考えられる。いかに書誌というものが各研究者の共通の利用に役立てるためのものであるとはいえ，編纂者の評価の入らない書誌を作る事は不可能な以上，評価・解釈の明示を含みつつ，汎用性に役立ちうる索引の具備が望まれるのである。そして，かかる計算機処理索引書誌は，経済史に計量経済史のあるのとの類比でいえば一種の計量学説史ともいうべきものの素材の一つと考える事が出来るであろう。

IV 学説史研究の補助手段としてのKWIC索引作成例

1. 19世紀 radicalism 研究

a) 機械処理目録作成実験 社会科学における書誌作成に計算機処理を導入する事は，日本ではわれわれの知る限りではまだ十分な市民権を得ているとはいわれない。特に学説史研究の手段としては，国際的にもポリンの書誌を除いてはまだ十分な成果をあげているとはいわれない様である。

いずれにしても，望ましい手法を開発するためには，実際に，この種の書誌を作成してみる他はない。かかる実験結果の解析が積み重なって，初めて次の段階に進む事が出来るといえる。われわれの行なった，ささやかな一連

の実験の一部は先に「社会科学のためのKWIC索引叢書」(KWIC index Series for Social Sciences) と題して上梓したが，書誌作成の技法という点からこれらの実験結果を展望してみる事にする。

b) 社会的運動体としての思想　われわれが書誌作成の対象として適合すると考えたのは，社会的運動体としての思想であり，経済学の分野に限定したとしても，かかる運動体は幾つかあるといえる。従来日本で比較的良く開拓されているのは，スミス (A. Smith) に始まるイギリス古典派経済学であるといえよう。[43] 従ってそこで従来すでに得られた成果を元にして作業をするならば，多少早く仕事が進んだかもしれない。然しここであえて，サン・シモン (Henri de Saint-Simon) とサン・シモン主義者達 (Saint-Simoniens) の運動をとらえる事にしたのはそれだけの理由がある。近代の経済理論のなかに共通に現われている生産力至上主義と，経営者職能に代表される様なテクノクラット尊重が一番明瞭に打ち出されたのは彼等の理論展開を通じてであり，ミル (J. S. Mill) を通じてイギリス正統派理論へ流れ，ある意味ではケインズ (J.M. Keynes) の独特の階級論に連なって行くこの影響は従来軽視されている。又父オーギュスト・ワルラス (Auguste Walras) を通じてレオン (Léon)・ワルラスへと流れるこの思想は，シュンペーター (J. Schumpeter) に代表される学説史家の手によって，単なる幻想家 (visionary, illuminé) と裁断されてしまい，ワルラス理論からは一般均衡理論だけを残して土地国有化論を含めてサン・シモン主義者的面を持つ社会全体を把握する忘向は捨てさられている。問題にされるのは単純にマルクス理論に影響を与えた側面でしか把えられず，全体として問題にされる事はなかったといえる。

現在の経済理論の認識の枠組自体が変換されなければならないとするならば，まさに，かかる認識の枠組の設定そのものを発生源に逆のぼって捉えなければならない。従って，われわれの試みは，この運動の総体を掴む事が目

---

(43) 書誌学者の天野敬太郎氏の仕事を始め国際的評価を得た水田洋氏のスミス旧蔵書目録校訂の作業などはこの一例であろう.

的となっている。[44]

当然次の段階には，この運動の対極をなす，農本主義的なフーリエ（Ch. Fourier）からプルードン（J-P. Proudhon）に通じる運動が，また，かかる思想的対立を準備した百科全書派——特にデイドロ（Diderot）対ルッソー（J.-J. Rousseau）——が検討されるべきであろう。然し一方では，これは社会的運動体を把えるための書誌作成の技法の検討をも目的としているのであるから，それらの全体の展開を念頭に置きながらサン・シモンとサン・シモン主義者を取りあげたといえる。[45]

2. 書誌作成の手順

a）手塚文庫目録作成から master-file 作成迄 われわれの作業の母体は，手塚文庫目録の作成作業に迄遡る事が出来る。[46]

当初手塚文庫目録は，第1次松尾正路・木田橋喜代慎目録を踏襲して書架分類の，P: philosophie et sciences naturelles, E: économic politique, S: mouvements sociales, D: droit et politique, M: mélanges に分けて作られていたが，本目録は第一義的に所在目録として使用されるという事を想定して，著者名配列に組み替えた。ただサンシモン主義者だけは小冊子類が様々に合綴されたものが多数あるので，一箇所に集めた。[47]

本来ならば，手塚寿郎教授の蒐書方針に合せて，フランス社会思想の潮流と経済理論，特に数理経済学の展開，との絡み合に焦点をしぼって独自の主題分類をすべきであったのであるが，時間的制約とその時点では，手塚書き抜き（cahiers）の解明が十分でなかったので現在出版された様な形に落着い[48]

---

(44) これらの点については稿を改めて記す予定である．取り敢えず拙稿［33］参照されたい．

(45) いまひとつは，最近のこの分野で重要視される割には，直接原資料を検討した研究が日本ではあまり見られない事を考えると，故手塚教授の蒐集に端を発するコレクションの日本における社会的共有財産化を目指したのだといえる．

(46) 坂田太郎他編として『フランス社会思想史文献目録』として上梓されている．

(47) この点については編者の津田助教授から，ここだけ別扱いするのは問題であるという指摘がなされていた．

(48) この部分については別箇の作業が進行中でありいずれ手塚 Cahiers による書誌として校訂結果を公表する予定である．

た。

その後，デル・ボー教授 (Del Bo) のこれだけの資料があるならばもう少し目録としては形が変えられたのではないかという批評もあり，改訂の手法を検討していた。たまたま1972年に，サン・シモン主義とフーリェ主義文献のサントネル (Léon Centnell)・コレクションが入手出来，小樽商科大学の同窓生の努力により大西・手塚記念文庫として設置する事が出来たの[49]を機会に，取敢えずサン・シモン主義に限定して，佐藤茂行・広田明の協力を得て計算機処理の書誌として作成する事にした。

目録は，運動のなかで生れた著作 (Series no. 2 近刊)［以下《原典》と略す］と，それに関する研究文献 (no. 3) に分れ，後者は，単行書 (vol. I)［以下《研究書》と略す］と雑誌論文等 (vol. II 未刊) に分れる。[50]

b) 収録文献　収録文献は，

	原　典	研究書
著　者	123	209
延点数	479	230

である。ここで，原典としてあるのは，第1版（予備版）での結果であり，目下改訂作業中である印刷用公刊版での数値とは異っている。

原典は全体として，手塚とサントネル両コレクションで成り立っている。手塚のコレクションは筆者が文庫目録作成のため現物照合をした際の感じでは，製本状況から見て，おそらく，二つの大きなコレクションを一括入手したの[51]を中心に作られたのではないかと想定される。そのうちの一つは，書き

---

(49) 拙稿［32］［33］参照.

(50) 松井［40］参照.

(51) 合綴の簡易自家製本は，当時のサン・シモニアンのシンボル色としてパンフレットの表紙に使用された紺の紙で，裏打ちにはしばしば，機関誌 Globe を使用していた事からサン・シモニアンが前所有者と推定される．鉛筆で ss n°— という書き込みのあるものがあり，それが同一コレクションに属するものと思われる．

アンファンタン (Enfantin) の著作の一つには，本人からコンスタン (Abbé Alphonse-Louis Constant) 宛の献辞のあるもの，フールネルの献辞のあるものなどがある．これらと文献の旧蔵者との関係は今では確認の仕様がない．

込み等から，恐らくフールネル (H. Fournel) の系統に属するサン・シモン主義者と思われる。従って，これがフールネルの活動をめぐる文献に強い理由をなすのではないかと推定される。(52)

又フーリエストのゲパン (Dr. Guépin) の書き込みのあるものが一点あるが，製本状況からして別のコレクションに属するものと思われる。

サントネル・コレクションの方は，その様なまとまったものではなく，氏が矻矻と集めたものと思われる。アノトオ (Gabriel Hanotaux) の注記の紙片の入った文献もあるが，全体として，アノトオの蒐集にかかる部分を受け入れたとも思われない様である。

研究書については，手塚コレクション 70 点，サントネル・コレクション 6 点，ワルチ (Walch) の書誌から補充したもの 131 点，われわれの手で補強したもの 30 点から成立している。

3. KWIC索引と刊年順索引

書誌事項を機械可読データに変換して，master-file を作成した後は，それを各種の分類をし作表する事によって索引を作る事が重要な作業になって来る。われわれの作業は，単純作業で作成したものがどこ迄利用可能かという事にも関心があったので，評価を含んだ様な descriptor の追加・件名の付与という事は行なわなかった。従って，作成しうる索引の種類も限定される。従来のこの種の機械処理の索引では作成されなかったとはいえ，学説史家の間で重視されていたものに，刊年順索引又は刊年順配列がある。ヒッグス (H. Higgs) の書誌や，フオックスウエル (Foxwell) の二つの蒐書の目録 (Kress 文庫，Goldsmith 文庫) がそれである。

---

(52) Fournel; *Bibliographie saint-simonienne, de 1802 du 31 décembre 1832.* 1833 の第 2 部サン・シモン主義者の著作との照合をすれば，(詳細は，松田 [33] に譲る) 項目 **a-n** までの蒐集は極めて周到であり，**p**. Missions. Églises des provinces. **w**. Crises Saint-Simmoniennes はかならずしも強くない．Scission de Bazard は 2 点，Scission d'O. Rodrigues はない．(但しサントネル・コレクションから 2 点補強された)．**y**. Menilmontant. では 16° の Feuilles Populaires は全 88 点が揃っている．

われわれの作業でも，KWIC索引と並んで重要なものとして刊年順索引を最初に作成した。

a) **刊年順索引**　刊年順配列を行なう事によって，原典については，運動の経過に伴う論客と出版点数の推移を追う事が出来た。ただ第1版（予備版）では，フールネルの書誌などで推定年代が判明している文献も，n.d. 扱いにしたことと，非所蔵分の書誌上での追加記入がかならずしも十分でなかったことのため，運動全体を量化するため宣伝活動の量的指標として書物媒体の出版状況を押さえるという役割は十分には果していなかった。

また作業の結果，マシアス (Baron de Massias) や，コント (Auguste Comte) の様な，サンシモン主義者には対立した人々の文献も，ポリンの様に注記記号を付して挿入する事と，各国語へ飜訳された文献を追加し，刊行地又は言語別配列をすべきである事がはっきりした。即ち運動自体の内部対立（メニルモンタンへの動きなど）と外部との対立，さらにそれが最近のファカール (Fakkar) の研究などで明らかになって来た様に国際的波及と影響力のあった運動の全容を直観的な形でなく明らかにする事が出来るであろうという意味で，書誌の新しい形態を作り出す可能性を持っているといえるからである。

研究書については書誌解題に記した様に単純な刊年順索引を解読する事によって，かなり明瞭に研究史の動向を把握する事が出来るが，それは，KWIC索引を並用する事によって可能であったともいえる。

b) **KWIC索引**　われわれは stop-word としては，最小限の指定しか行なわなかった。その結果は，

		原　典	研究書
key word	異り語数	1399	695
	延語数	4324	1348
stop word	異り語数	97	109
	延語数	3067	1076

である。

第1に注目に値するのは，原典の方が，運動のなかの宣伝用パンフレット類が主力であるだけに，疑問詞や前置詞類が多く，stop-word の延語数が著しく多くなっている事である。

第2に，KWIC に現われる key word について両者を対比する事によってサン・シモン主義者の本来の関心と研究者の関心とがどの程度一致するか，又は違っているかが分析出来る。しかもそれを，先に述べた様に年代順索引と組み合せる事によって，研究史の動向を追う事が出来る。われわれの得た結論の一部は，書誌解題で示しておいたが，当初予想していた以上の成果があったというべきであろう。

今後の問題としては，i) 原典についていえば，機関誌類に載った論文を同様に処理したならば，どうなるか，——もっと運動の細部に渡っての検討が可能になるのではないか。ii) 他の同時代の関連する運動——フーリエ主義者，カベーの仲間など——と対比した時どの様な結果が出るか。iii) 研究書についていえば，単行書標題であるための sophistication から脱れるために内容細目を入れたら，どのようになるか。といった点があげられる。

KWIC索引固有の問題として検討の必要なのは，stop word として何を指定するかという事である。[53] stop word の数を最小にするよう努めた事は意味のある key word を落さない点では効果的であったが，採録点数の増加したときは，検索効率を高めるために，何等かの制限を必要としてくるといえる。また使用言語数の増加と共に，不可避的に thesaurus を作成しておかなければ見落しの発生する可能性が出て来るといえる。（例えば，United States ↔ USA ↔ America ↔ Etas-unis etc.; Russia ↔ Russe ↔ Soviet ↔ SSR ↔ USSR etc.）

これらは，主題毎に更に実験を積み重ねる事によって漸次的に解決する事が出来るであろう。

---

(53) 松井［37］.

4. MARCの特質と所蔵・所在調査

a) **重複打出とMARC**　いわゆる MARC Project は Machine Readable Catalogue (機械可読目録) の略語であったが，この種の機械可読目録が，先に論じた様に索引として特殊な形態の目録の打出しに利用しうるのであるが，その他の特質としては，重複打出しが可能な事があげられる。

今回作成した一連の書誌は，それぞれの索引を，単に master list に対する補助的参照手段として，文献番号だけを打出す（例えばポリンの書誌）のではなく，索引だけで，ある程度の情報を供給する様に，字数の許す限り書誌部分を重複打出をしている。従ってそれぞれの索引が通読に耐えるといえる。

われわれの実験に先行するものとしては，ハーヴァド大学の中央図書館 (Widener Library of Harvard University) の計算機処理による書架目録の冊子体形式での刊行がある。[54] これには書架分類による分類目録，著者・書名目録，刊年順目録が完全に重複して打出されている。これは，所蔵目録が，同時に主題書誌として活用しうる例を作り出したものといえる。

また，これは，目下進行中の作業であるが，全書架目録が機械可読目録になった時，書架目録であるための分類上で，単一記載の制約を超えて，複数記載，他分類項目の重複打出し（例えば，地域史 American History のなかに Cultural Anthoropology などからの関連部分の追加）が可能になるので，その時点での再編集を予定している。この他に，MARC II Project の進行につれて，現在は書架目録カードの記載をそのままに機械可読にしたものを容易に MARC Project による詳細・標準化目録に転換しうるとしてそれをも全体の計画の射程に収めている。

b) **書誌記載の統一**　この書誌記載の標準化は，今回の作業に於ても最大の問題であった。原典の部は第一次作業として現物照合可能なものに限定したが，研究書の部は，出来うる限り現物照合を図ったが，かなりの部分が，

---

54) De Gennaro [7].

他の書誌・目録に依存した。所で，現物照合の可能なものについて，これらの書誌・目録の記載と照合した結果は，多くのものにかなりの杜選さが見られた。

当然の事であるが，今回作成の様な書誌作成には所在調査が不可欠の予備作業であり，その実施過程で最大の障害となっているのが，総合目録 Union Catalogue の日本における欠如であるといえる。

われわれの主題書誌作成の試みは，総合目録の不在の世界での自衛手段としての性格をも一面には持っていたのであるが，この作業は再びわれわれを総合目録作成へといざなって行くといえよう。

(1973. 7. 31)

参考文献目録

[1] Amano; 天野敬太郎「書誌の発達と現状」『仙田正雄教授古稀記念図書館資料論集』丸善KK; 1970. pp. 一〜二〇所載.

[2] Astall, Ronald; *Special Libraries and Information Bureaux*, London, Clive Bingley, 1966.

[3] Benge, Ronald; *Libraries and Cultural Change*, London, Clive Bingley, 1970.

[4] Brodie, Nancy E.; Evaluation of a KWIC index for library literature. *Journal of the American Society for Information Science*. 1970. Jan.

[5] Burkhalter, Barton R. (ed.); *Case Studies in Systems Analysis in a University Library*, Metuchen, N. J., The Scarecrow Press, Inc., 1968.

[6] Cox, Nigel S. M. and Grose, Michael W. (ed.); *Organization and Handling of Bibliographic Records by Computer*, Newcastle, Oriel Press Limited, 1967.

[7] De Gennaro, Richard; Harvard University's Widner Library Shelflists conversion and publication Program. *College & Research Libraries*. Sep., 1970. vol. 31. no. 5.

[8] Dolby, J. L.; *Computerized Library Catalogs: Their Growth, Cost, and Utility*, Cambridge, Mass., The M.I.T. Press, 1969.

[9] Fairthorne, R. A.; *Towards Information Retrieval*, London, Archon Books, 1968.

[10] Fischer, Margerite; The KWIC index concept; a retrospective view. *American Documentation*. April. 1966.

[11] Foskett, A. C.; *The Subject Approach to Information*, London, Clive Bingley, 1969. 2nd edition, 1971.

[12] Fujii; 藤井栄一「書評; ラフエルとシスコ「図書館のシステム分析」」『商学討究』第23巻3号, 1972年10月.

[13] Hale, Barbara M.; *The Subject Bibliography of the Social Science and Humanities*, Oxford, 1970. (International series of monographs in library and information science. General editor; G. Chandler)

[14] Harvey, John (ed.); *Data Processing in Public and University Libraries* (Volume Three, Drexel Information Science Series), Washignton D.C., Sparton Books, 1966.

[15] Helbich, Jan; Direct selection of keywords for the KWIC index. *Information Storage and Retrieval*. 1969.

[16] Hosoya; 細谷新治「社会科学ドキュメンテーションの現状と動向」伊大知良太郎他共編『社会科学ドキュメンテーション』丸善, 1968.

[17] Houghton, Bernard (ed.); *Computer based Information Retrieval Systems*, London, Clive Bingley, 1968.

[18] Iwasaru; 岩猿敏生「大学図書館蔵書論」『仙田正雄教授古稀記念論集……』所載.

[19] Jahoda, Gerald; *Information Storage and Retrieval Systems for Individual Researchers*, New York, Wiley-Interscience, 1970.

[20] Janda, Kenneth; *Information Retrieval; Application to Political Science*. Indianapolis, & New York, 1968.

[21] Jeffereys, A.E. and Wilson, T.D. (ed.); *U.K. MARC Project* (Proceedings of the Seminar on the U.K. MARC Project). Newcastle, Oriel Press Limited. 1970.

[22] Kato; 加藤宗厚「件名目録の運命」『図書館界』19巻6号 (102号) 1968年3月.

[23] Kawai; 河井弘志「大学図書館——研究図書館の蔵書分担収集—— DFG 勧告と Marburg 大学の協定制」『図書館界』25巻1号 (133号) 1973年6月.

[24] Kidahashi; 木田橋喜代慎「件名標目下における著者順配列は合理的か」(第2回北海道地区大学図書館職員研究集会, 於北海道大学) 1957. (mimeog.)

[25] ditto; 「図書館業務の機械化(2)——KWIC索引の解説——社会科学——」(昭和48年北海道地区大学図書館職員集会, 於北海道大学) 1972. (mimeog.)

[26] Kochen, Manfred; *Some Problems in Information Science*, New York

and London, The Scarecrow Press, Inc., 1965.

[27] Kochen, Manfred (ed.); *The Growth of Knowledge*, New York, John Wiley and Sons, Inc., 1967.

[28] Kraft, Donald H.; A comparison of keyword-in-context (KWIC) indexing of titles with a subject heading classiffication system. *American Documentation*. Jan., 1964.

[29] Kuhn, S.; *The Structure of Scientific Revolution*, Univ. of Chicago Press, 1962.

[30] Linderman, Winifred B. (ed.); *The Present Status and Future Prospects of Reference/Information Service*, Chicago, American Library Association, 1967.

[31] Matsuda; 松田芳郎「Deus ex machina なしの図書館近代化」『経済資料研究』4号, 1971. 9.

[32] ditto;「大西・手塚記念文庫設立と早川文庫入手について——図書館に囚われるの記——」『緑丘』88号, 1973, 6月.

[33] ditto; *The Ohnishi-Tedzuka Memorial Library*. Otaru, 1973 (to be published.) (The Ohnishi-Tedzuka Memorial Library of Otaru University of Commerce Series. No. 1)

[34] ditto;「近代経済学者の擬装 転向 の論理——日本近代経済学定着史断章」『風土と論理』第3号, 1965. 9.

[35] ditto;「日本経済の計量分析」, 山田勇編『計量経済学講義』青林書院新社, 1972. 所載.

[36] Matsui; 松井幸子「境界科学の文献検索とLC件名の利用——管理科学文献について——」『商学討究』22巻2-3号. 1971. 11.

[37] ditto;「社会科学におけるKWIC索引の現状と可能性」(第1回全体研究集会報告予稿) (mimeog., 1972. 7月31日, 8月9日).

[38] ditto;「情報検索と電子計算機」『北海道大学大型計算機センター・ニュース』4巻1号. 1972.

[39] ditto;「PL/Iによる文字列の処理」(プログラミング・ノート No. 11)」『北海道大学大型計算機センター・ニュース』4巻3号. 1972.

[40] ditto;「文献目録の機械編纂の技法と問題点——社会科学分野での現状と実験例——」『商学討究』24巻2号. 1973. 9.

[41] Miyachi; 宮地見記夫「引用文献からみたわが国経済学の文献利用」『図書館界』22巻3号 (1970, 9月).

[42] ditto;「引用文献からみたわが国経済学と周辺領域」『図書館界』23巻3号 (1971年9月).

[43] Mori; 森耕一「蔵書構成の適否をはかる一方法」『図書館界』23巻4号. 1971.

[44] Moriguchi; 森口繁一（研究代表者）『大学図書館と電算機』（科学研究費・特定研究 I「学術情報処理に関する基礎的研究」昭和45年度報告書）1971.

[45] ditto;「大学図書館とネットワーク』（同上. 昭和46年度報告書）1972.

[46] ditto;「大学図書館と情報処理』（同上. 昭和47年度報告書）1973.

[47] Nagasawa; 長沢規矩也「現代図書館に関する諸問題」『仙田正雄教授古稀記念論集……』所載.

[48] Nagayama; 長山泰介「言語による整合索引」『情報管理』13巻9号（1970. 12月）.

[49] Needham, C.D.; *Organizing Knowledge in Libraries*, London, Andre Deutsch Limited, 1964.

[50] NIPDOK; 日本ドクメンテーション協会（編）『機械化による情報システムの革命』NIPDOK, 1767. (NIPDOK シリーズ4).

[51] Pritchard, Alan; *A Guide to Computer Literature; an Introductory Survey of the Sources of Information.* London, Clive Bingley, 1969.

[52] Sugihara; 杉原四郎「図書館員に何を期待するか」『図書館雑誌』67巻7号（1973年7月）.

[53] ditto et al. (ed); 杉原四郎「古典派経済学と『東京経済雑誌』」長他編『日本近代経済思想史』(I) 有斐閣, 1969.

[54] Swanson, Don A. and Bookstein, Abraham (ed.); *Operations Research: Implications for Libraries*, Chicago, The University of Chicago Press, 1972.

[55] Tamanoi; 玉野井芳郎『日本の経済学』中央公論社, 1970. (中公新書).

[56] Tauber, Maurice and Associates; *Technical Services in Libraries*, Columbia University Studies in Library Service, no. 7), New York, Columbia University Press, 1953.

[57] Vickery, B.C; *On Retrieval System Theory*, London, Butterworths, 1961 (first edition), 1965 (second edition).

[58] ditto; *Techniques of Information Retrieval*, London, Butterworths, 1970.

[59] Yamashita; 山下 栄「件名目録開運論」『図書館界』23巻4号（1971. 11月）.